

「今度、うちのビルの2階が空くんで画廊をやることになったよ」
 「へえ画廊をねえ。場所がいいから繁昌するだろう」
 「うん、銀座の一等地だからな。だがねえ、こちとらは新参者だよね。いまいろいろ、聞き歩いているが、席料は1日6万円が相場らしい」
 「繁昌さえすりゃ、いい商売なんだろう」
 「うん。だがなあ係りのやつに言わせると、画廊の数が多すぎて結構つぶれる店が多いんだそうだ。2月8月は不景気だから割引値段にしようと思っている。お前さん、絵を描いてんだったら、どうだい一つうちで個展を開かねえか」
 「冗談じゃねえ。勝手に描いてるだけだ。個展なんて考えてみたこともねえ」
 「そうかなあ、けどお前さんは締切りのない文章は絶対に書けないって言ってたじゃねえか。絵は締切りなくても描けるのかい」
 「……」

長年の友人Tから、個展開催をもちかけられたのは、もう15年も前の話である。昭和62年(1987年)の春だったと思う。この年の正月には、喉頭癌を宣告されてあわてふためいたからよくおぼえている。当時は癌という助からないという風潮があったからだ。1月30日から3月23日まで入院した。1日2回の放射線治療を60回受けた。治療をまっとうしたので、医師も看護婦も大層喜んでくれた。命拾いをしたとほんとに思った。手術をしなかったから声を失わないですんだ。有難かった。

それと同時に、何時死ぬかわからねえぞ。やり残したことをやらねえと後悔するぞ。と本当に思った。私は会社を辞めたら歌人、画家、随筆家になるんだと、かねがね若い人たち(会社の部下、大学の学生たち)に広言していた。これが果たせなくなると思った。

6月に病気を盾にとって会社を辞めた。身体の調子は極めて良かった。声は治療前より良くなったと医者は言った。夏になり、秋になり、冬になった。病気が回復するにつれて、段々生活における緊張感が薄くなっていった。そう簡単には死ぬめえという、考えが頭を持上げて来た。こんな時、Tの言葉を思い返した。そうだ、自分を追込まねえと、折角の病気が無駄になるぞ、ということに気がついた。

年の瀬が迫って来た頃、画廊へでかけた。2月8日が4割引きなので、いま申し込んでも1年2ヶ月後の2月だと言うことだった。昭和62年の暮のことである。だから、第1回展は、平成元年の2月に決った。――今回は、一貫して報告文になってしまった。キラリと光るものが何処にもない。風邪ひいてアルコールが入らなかった故かもしれない。

2002・04・17 (つづく)

1987 12月10日 東京
 1988 (63) 4月 銀座 画廊 (念記)
 1988 10月2-10日 花房 (銀座 衛道)

1989 2月 1日 展
 (平成元年)

62
 63

64